彫刻家を何等苦しめたものでないとは、何人も言ひ得ない所である。我々は、益彼等に親しむにつれて、之に附纏つてゐる相反する二潮流があり、之を絶えず縫つて進んでゐる事がわかる。其一方は、制へ難い熱望から新しい挿話を現はしてゐる事で、他方は、相傳の遣り方を迷信的に尊重してゐる事であつて、此矛盾した二傾向の融和を絶えず試みて工夫を凝らしたのである。佛陀を現はさないで之を想はせるのに用ひた象徴では、樹下の寶座と、天蓋のある寶座とが、當然最もよく用ひられてゐる。蓮と塔とは、勿論世尊又は過去佛の誕生と入滅とを示すに使つたのみであり、輪に至つては、釋尊の説法に限られてゐて、稀に見る所であつたが、之を用ひてゐる今一つの場合を示してゐる。之は舍衞城の邊で、波斯匿王の前での大説法に關するもので、世尊が六外道を教化した場合の事である。バルハットの浮彫に(乙、附圖第二十八、二圖)この意を二小銘で示した場合が正しく之である。古彫刻家は更に他の試みをしてゐる。例へば、サーンチーの東門に二箇所、新象徴で目に見えないで佛陀の現前する意味を現はして、佛陀の遊歩する高臺を單に石疊にしてゐる